



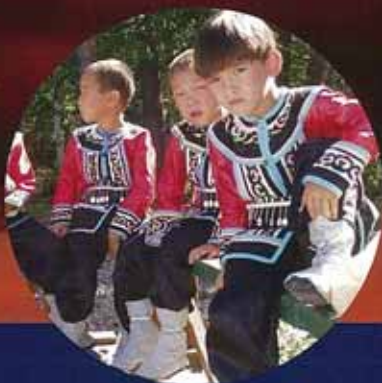
東北大学

講演

地球温暖化と私たちの未来

Climate Change and Our Future

江守正多 氏 (国立環境研究所地球環境研究センター (気候変動リスク評価研究室) 室長)



講演

狩猟民世界からのメッセージ

—自然界のなかの人間存在

Message from Hunters' World: Human Being in the Nature

荻原真子 氏 (千葉大学名誉教授)

2016 年

12月4日(日)

14:00 ~ 16:30

会場

東北大学川内北キャンパス
マルチメディア研究棟 6F 大ホール

(地下鉄東西線川内駅下車、「南2」出口より徒歩1分)

※駐車場はございませんので、公共交通機関をご利用ください。



北東アジアの環境
文化的認識と政策的関与

東北大学東北アジア研究センター 公開講演会



荻原 真子 [おぎわら しんこ] (千葉大学名誉教授)

1965年に上智大学外国語学部ロシア語学科卒、東京大学大学院博士課程修了(文化人類学)、学術博士。北方民族学専攻。千葉大学文学部教授を経て、同大名誉教授。特に、アイヌ文化およびアムール・サハリン地域、シベリアの民族学、口承文芸(神話・伝承、英雄叙事詩)を研究、またロシア各地の博物館に所蔵されているアイヌ民族資料の調査を行っている。主要著書に『東北アジアの神話・伝説』東方書店(1995年)、『北方諸民族の世界観』草風館(1996年)、『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』(共編著)草風館(1998年)など。

講演「狩猟民世界からのメッセージー自然界のなかの人間存在」

Message from Hunters' World: Human Being in the Nature

人類の歴史の大部分は狩猟民の文化であった。その伝統は現代の私たちの社会にも諸処に継承されている。21世紀の今日、私たちが抱えているグローバルな問題、特に、生態系にかかわる地球環境の問題は、現代社会と次世代の子供たち、その未来に限りない不安と懸念を与えている。宇宙から眺められる地球は美しい...

シベリアの多くの民族社会は19、20世紀を通じて深刻な政治経済・社会的な変革をへてきたが、その古くからの狩猟民文化の伝統は今日もなお日常の生活や精神文化のどこかに生きつづけている。その世界観は殊に言語文化である口承文芸(神話や昔話、英雄叙事詩など)にさまざまに投射され、人々の意識や価値観の基底にある。シベリア各地で集められた数多の説話から、私たちは自然界での人間存在ばかりでなく、あらゆる生命の在りようについて、狩猟民的な叡智を学ぶことができる。



江守 正多 [えもり せいた] (国立環境研究所地球環境研究センター(気候変動リスク評価研究室)室長)

1970年、神奈川県に生まれる。1997年に東京大学大学院総合文化研究科博士課程にて博士号(学術)を取得後、国立環境研究所に入所。「地球シミュレータ」の現場で研究を行うために2001年に地球フロンティア研究システムへ出向し、2004年に復職した後、温暖化リスク評価研究室長等を経て、2011年より気候変動リスク評価研究室長。

専門は地球温暖化の将来予測とリスク論。気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第5次評価報告書主執筆者。

著書に『異常気象と人類の選択』、『地球温暖化の予測は「正しい」か?—不確かな未来に科学が挑む』、共著書に『地球温暖化はどれくらい「怖い」か?温暖化リスクの全体像を探る』、『温暖化論のホンネ—「名義論」と「懐疑論」を超えて』、『気候大異変地球シミュレータの警告』等がある。2012年度日本気象学会院内賞受賞。

講演「地球温暖化と私たちの未来」

Climate Change and Our Future

昨年末に国連気候変動枠組条約のCOP21で採択された「パリ協定」で、世界平均気温上昇を産業化以前を基準として2℃より十分低く保ち、さらに1.5℃より低く抑える努力を迫及することが合意された。これを実現するために、世界の温室効果ガス排出量を今世紀後半に正味でほぼゼロにすることも合意された。温室効果ガス排出の主要部分はエネルギー起源の二酸化炭素であるから、これは化石燃料に依存しない社会を今世紀中に実現するという国際社会の決意を意味している。

では、果たしてそんなことが可能だろうか。また、なぜ「1.5℃」や「2℃」を目指す必要があるのだろうか。

本講演では、地球温暖化の現状、将来予測、リスクについての科学的な評価を概観し、この問題に私たちがどう向き合っていくべきかを考える。